

記憶に残る私の仕事, そしてあの街

「古文書を基に安藤広重が描いた姿に“猿橋”（日本三大奇矯の一つ）を復元」

柳川 裕



山梨県大月市にある”猿橋”は、昔からその形状と美しさで人々に親しまれてきたが、構造的には兩岸の絶壁から棟と桁とを幾段も突き出してかけた「桔（はね）木」で橋全体を支えた橋脚のない特異な形状だけに部材が腐朽しやすく、200年以上前からしばしば架け替えまたは修復を重ねてきた。

昭和54年に、昭和26年に架設されたものの腐朽に伴い架け替えることとなり、文化庁に修理委員会が発足し現状調査と共に、復元方法の検討が開始された。架構は、詳細が残されている嘉永4年(1851)の古文書に準拠し、江戸時代の趣を伝える安藤広重が描いた姿そのままの復元とし、従来の橋幅5.5mより狭い3.33mとし、桔木3列4段であったものを2列4段とし、最上部の行桁（ゆきげた）は架け替え前と同様3本通しとなった。

桁材は、所定寸法の檜材の調達が困難なことと今後のメンテナンス面より、H形鋼（防錆考慮）とし外観は変えないように外皮として厚い木材（台湾檜、防腐考慮）を取付け実施することとした。

今回実施計画・工事の関係者として主に担当してきた架け替えに伴う現存橋の解体及び復元架橋の具体的施工

方法については、当時の技術を駆使しメンテナンス・耐久性を考慮し各種の実験確認を踏まえて、修理委員会との調整、地元自治体への説明などを並行して工程を進めていった。

架橋場所は、兩岸が高さ約30m(水際まで)の断崖であり、昭和55年より工事期間中の安全性、作業性を考慮し、従来橋を取込んだ仮設吊り橋を設置し、昭和56年より解体作業に入った。

昭和57年からは復元工事に移り、桔木部の根元をコンクリート（従来は土）で固めながら突き出しを進め、行桁（鉄骨、ボルト接合）を架設、高欄、橋板受根太、橋板を施工していった。

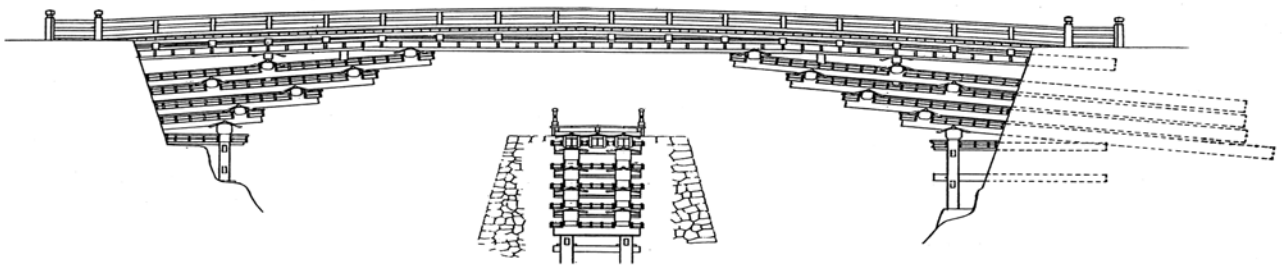
- ・橋の長さ：17間（30.9m）

- ・橋の幅：11尺（3.33m）

通行可能幅：約8尺（2.40m）

- ・竣工、渡り初め：昭和59年8月11日

これ迄、建築面では施工計画・方法などもの作りの種々面白さを体験してきたが、今度このような歴史的作物物に関与が出来たことは、その後の業務に貴重な経験を応用することが出来た。



橋梁側面・断面図（大月市渡り初め資料より）



橋梁側桁面より



桔木部